

「第四回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告

キリストさんと呼ばれて——この時代、この地でキリスト者であること

「第四回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告 序文

東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員

青山学院大学教授 藤原淳賀

東日本大震災から五周年となる二〇一六年、フラー神学大学院と共に、「第四回東日本大震災国際神学シンポジウム」が行われた（二〇一六年二月二十九日「月」、三月一日「火」、お茶の水クリスチャンセンター）。

第一回東日本大震災国際神学シンポジウム（二〇一二年）のテーマは、「いかにしてもう一度立ち上がるか——これからの一〇〇年を見据えて（How can we start again? Centennial Vision for Post-disaster Japan）」であった。これは、そこから続く国際神学シンポジウムの共通テーマとなった。第二回（二〇一三年）のテーマは、「苦難に寄り添い前に向かう教会（The Church: Embracing the Sufferers, Moving Forward）」第三回（二〇一四年）のテーマは「苦難を通じ、壁を越えて、次の世代へ（Raising Leaders through Sufferings beyond Walls）」であった。震災後、変わりつつある状況を見ながら、現地の教会が最も必要としているテーマを見出してきたと思う。またこれからの一〇〇年を見据えて、この第三回シンポジウムから二日目は青年、若手の教職・信徒向けの会を持つことにした。また同様にこの回から、神戸のいくつかの神学校からのお招きがあり、神戸でも国際神学シンポジウムを持つこととなった。

この三年間の活動を通して、今まで互いに面識のなかった様々な団体のリーダーたちと顔の見える信頼関係を築くこ

とができ、さらなる共働を続けることとなったことを嬉しく思っている。

第四回のテーマは「キリストさんと呼ばれて——この時代、この地でキリスト者であること (Being Called “Kirisuto-san”: Re-visiting Christian Identity in Post-disaster Japan)」とした。震災後の支援活動の中、親しみを持って「キリストさん」と呼ばれることがあった。日本のキリスト教人口は1%以下である。九九%の方々にとつては、私たちキリスト者は教派教団を越えて「キリストさん」であるということに気づかされた。また人びとは私たちの内におられるキリストを見られたのかもしれない。教会外からの視点を念頭に置きつつ、宣教、支援、社会への関わり、教会形成を考えるシンポジウムとした。大震災を通して私たちは様々な壁を越えて共に働くことを学んできた。これは震災を経験した日本の教会から、世界のキリスト教会に対しての貢献でもある。

第一日は小林高德先生（東京基督教大学学長）を総合司会者として進められた。主題講演はウィルバート・シエンク先生（フラー神学大学院教授）による「災いに備えて」と吉田隆先生（東北ヘルプ代表、神戸改革派神学校校長）による「キリストさんと呼ばれて——この時代、この地でキリスト者であること」であった。

続いて午後には、「線香の一本でもあげていけ」というテーマでパネル・ディスカッションを行い、藤原が司会を務めた。この言葉は、パネリストの一人、米内宏明先生（日本バプテスタ教会連合理事長、国分寺バプテスタ教会牧師）たちが被災地で奉仕していた際に実際にノンクリスチャンの方から掛けられた言葉である。キリスト教会では、通常、偶像礼拝を避けるために、線香をあげないように指導している。しかし奉仕活動をする中で、愛する人を失った方から掛けられたこの言葉には大きな重みがあった。そしてこの言葉を中心に宣教のあり方について話し合った。他のパネリストは、小田武彦先生（聖マリアンナ医科大学教授、カトリック大阪大司教区司祭、日本宣教会会長）、加藤誠先生

(日本バプテスト連盟・大井バプテスト教会牧師、前日本バプテスト連盟常任理事)、野田沢先生(日本基督教団SCF「学生キリスト教友愛会」主事)であった。その後、「東日本大震災から五年を迎えて」をテーマに諸団体の今までの働きを振り返って、分科会を持った。

第二日は藤原の総合同会で進められた。主題講演は、ウイルバート・シエンク先生による「災害の様相——キリスト教的愛の形」であった。

これからの一〇〇年を見据える時、最も緊急かつ深刻な問題は、教会に青年がいないということである。キリスト教に関心を持つ青年がどこにいるのか。最も明らかなのは、キリスト教学校である。その青年たちは被災地にも支援に向かっていた。教会の高齢化が進む中、キリスト教学校と教会を繋げていかなければならない。青年たちに、なぜ教会に行かないのか、教会の何が問題なのかについて語ってもらった。昼食時には、それに基づいてテーブル・ディスカッションを行った。

午後には、それに対する教会側からの応答をお願いした。網中彰子先生(日本キリスト教協議会総幹事)、比企敦子先生(日本キリスト教協議会総主事)、岡村直樹先生(東京基督教大学大学院教授)、小川真先生(キリスト者学生会会「KGG」主事)にパネリストとしてご発表いただき、松本周先生(聖学院大学)の司会でディスカッションが行われた。

本報告には、第四回のシンポジウムで行われた主題講演、パネリスト発題の一部を収めている。また、本書には英文も掲載されている。

聖学院大学は、第一回からこの第四回まで、経済的にも、人的にも、また出版の面でも、主催団体として国際神学シ

ンポジウムを支えて下さった。特に阿久戸光晴理事長はお忙しい中、全てのシンポジウムにご出席下さっただけでなく、祈祷、説教等を通してご奉仕下さった。心から感謝を申し上げます。